妻と行く旅吟

玻座真内科医院
玻座真　博公

「おーい、ギンコウに行ってくるよ」
「あなた、日曜日なのに銀行に行ってどうするのですか」
「吟行に行ってくるんだよ」

俳句を始めた頃は、このような話の合わないこともありました。一般の方には馴染みのない言葉でも俳句を作る人達には新しい句材を求める欠かせない出会いの場です。本稿は初句集以後の句を紙面の都合で、吟行の一つである旅吟に限らせて頂きますが、旅吟といえば芭蕉でしょう。芭蕉は『野ざらし紀行』の旅で始まる41才から亡くなる51才までの10年間、その半分を旅に過ごしました。凡人には真似の出来ないまでも何時かはまとまった時間を使っての旅への憧れはあります。この1～2年の句稿を調べてみて、かなりの旅に行っていることに自分ながら驚きました。入院を閉めてから気ままな時間を過ごせるようになったことも一因でしょう。

旅吟は「その地で詠む。その地を詠むのではない。」と言われますが、なかなかそうは行きません。観光俳句とのそしりを受ける覚悟でいくつかの句を披露させて頂きます。

(冬・新年)

那須塩原・会津の旅

平成21年の大晦日は塩原温泉に泊まりました。近くの塩原ダムに全長320mのもみじ谷大吊橋が架かっています。強い風にゆさぶられながら渡りました。<渡るごとくに>と例えにしたのは、大晦日を過ごす多くの人達の気持ちを思ってのことでした。

大吊橋渡るごとくに大晦日
山の端を虹の輪まとふ初日かな
大内宿茅の色なす軒氷柱

北陸・飛騨の旅

大雪のため、車を動かせず、何時間も車内に閉じこめられているとのニュースを聞く時節でしたが、国道は除雪されており、一本の道だけが雪の中に伸びていました。雪から木を守るために方々で雪吊りを見ました。兼六園には唐崎松があります。十三代藩主前田斉泰が琵琶湖の松の名所唐崎から種子を取りよせて育てたものです。加賀百万石の面影が残る武家屋敷跡にぼっこ石がありました。ぼっこ石とは下駄の雪をおとす石のことです。

一本の国道のぶる雪景色
雪吊りや由緒ある木もなき木々も
屋敷跡雪踏みゆけばぼっこ石
立札の落雪注意寺の門

(春)

奈良・和歌山の旅

念願の吉野山千本桜を見ることが出来ました。張り切りすぎた為、少し気分を悪くして妻にたしなめられました。山の神ならぬ虚空蔵菩薩が寅年生まれの人の守護仏であることを知ったのも今度の旅の収穫の一つでした。吉水神社は中千本へ行く途中にあり、源義経と静御前の別れの場所です。

吉水や春灯けぶる哀史の間
義経の鎧華奢なり花の冷え
飛花残花虚空蔵菩薩見守れり
弘法も我も寅年四月馬鹿

大分・熊本の旅

ゴールデンウィークは正月休み以外でまとまった休みの取れる旅のチャンスです。5月6日の立夏とつながるそれこそ晩春の候で、季語の選択に苦労します。福岡からのバスの長旅で宇佐神宮をお参りしたあと、国東の千財農園の藤

の花は見事でした。5月3日、別府より湯布院を経て九重へ出ました。血の池を覗いたり、九重の夢の大吊橋を渡ったりして憲法記念日をかみしめました。

行く春や両手に触るる御神木
国東の藤の香りや茶の香り
血の池に黙す憲法記念の日
大吊橋軋む憲法記念の日
夏近し馬糞かがよふ草千里

(夏)
東京の旅
毎年、日本内科学会生涯教育講演会が有楽町の東京国際フォーラムで有ります。その年は父の日に当たり、たまたま国際フォーラムの横の広場で骨董市が開かれていました。昼休みに覗いて手頃な浮世絵を手に入れる幸運に恵まれました。

父の日の骨董市に父集ひ

京都の旅
金閣寺からきぬかけの路をゆるやかに上ると竜安寺に行き着きます。

サングラス外してからの金閣寺
妻と行くきぬかけの路風薫る
石庭の石は語らず油照り

(秋)
北東北の旅
秋田・岩手・青森にまたがる旅でした。一日目、角館はみちのくの小京都と呼ばれ、深い木立と武家屋敷が藩政時代の面影を残しています。二日目、宮沢賢治記念館を訪ねた9月21日は奇しくも賢治の忌日でした。三日目、朝には浄土ヶ浜の波に漂う鴎達との一時、昼には山紅葉、夜には山中の月と楽しみました。

武家屋敷の鯉は大振り水の秋
人囲むミニコンサート賢治の忌
鴎あそぶ浄土ヶ浜や秋彼岸
みちのくの日暮れは早し山紅葉
八甲田一峰めざす月の舟

広島宮島の旅

宮島や鹿の寝そべる神無月
紅葉散る水面ゆすりて錦鯉

(追記)
3月11日の東日本大震災の折は、テレビの時々刻々に変化する映像に身震いする思いでした。改めて被災地の皆様に御見舞いを申し上げます。俳人は時事問題を詠むのに不向きと思われていますが、新聞俳壇に多数の句を拝見し感服しました。第三者的に悲惨な状況を詠むのは憚られる思いもありました。少し間を置いて詠んだ御見舞いの句を披露させて下さい。

春はあけぼの避難所に笑み生まれ
春の海御霊を擁す地震のあと
震災の瓦礫かきわけ涅槃西風
竜天に性善説を疑はず
復興の道ひとすじに夏近し

新・東村立診療所

東村立診療所
外間　章

連休明けの5月9日、新しい建物での診療を開始した。待望の診療所である。基本設計にあたって、3つのことを注文した。その一つは、駐車場から段差なしで診療所に入れること、その2、履き替え不要にすること、その3、電動ベッドを入れること。要するに、お年寄りに難なく入ってもらえるようにすることであった。旧診療所の難点を改善しようとの思いであった。そして、内部はシンプルに、スペースは広めに、内装は簡素に、と要望した。

村役場庁舎に隣接して、保健福祉部門（保健指導所、社会福祉協議会）の一角に、コの字型の端に位置している。駐車場から暖いスロープで入り口に近づくと電動ドアが開く。重い扉を開く必要はなくなった。

例年3月には、東村のつつじ祭りが催される。会場となるつつじ園エコパークに足を運ばれた諸兄諸氏も少なからずおられることと思う。残念ながら今年は寒冷のためにつつじの開花が良くなく、また、東日本大震災のためにつつじマラソン大会も中止となり、閑散としたものとなった。「新・診療所」はつつじ園に登っていく坂の途中にある。平良の集落を通る海岸沿いの県道から東村では2つしかない信号機を山手に上っていくと右手に「東村立保育所」の看板が目に入る。この保育所も新築された。県内では初めてと言うコンクリートのない総木造の子供たちに優しい建築である。保育所の看板の手前で右に折れると役場庁舎の赤い瓦の屋根が現れる。その屋根から目線を右に回すと坂の斜面に隠れていた新しい建物があらわれる。駐車場の入り口には、「東村保健福祉センター・東村立診療所・保健福祉部門」の新しい看板が立っている。

診療所の入り口を入ると、右手に待合室と受付があり、左手には「リハビリ・訓練室」がある。待合室には3畳ほどの畳の間もある。「リハビリ・訓練室」は「診療所」ではなく、「保健指導所」の管轄である。総ガラス張りの見晴らしの良い部屋である。診療所に戻ると、受付の部屋には、カルテ棚と薬品棚が背中合わせに並ぶ。隣の診察室に機能よくつながる。広めのデスクの上には電子カルテの画面とシャウカステンの替わりにフィルムレスの画面が並んでいる。デスクの反対側には電動ベッドがあり、頭部にはエコーの機器を配置した。診察室に続く処置・観察室は、手前に小手術可能なスペースに処置台と無影燈および機材・薬品棚が壁に配列された。奥の方には、観察ベッドを3台置く。スペースは広めである。南西に面した窓からは平良湾を形成する慶佐次の山並みが視界に入る。絶景である。診察室・処置観察室と廊下を隔てて反対側には、検査室を挟んで男子用トイレと女子トイレがあり、レントゲン室、倉庫、スタッフ休憩室が続く。コンパクトなレイアウトである。大方、イメージどおりの出来上がりとなった。一つ設計ミスがあった。完成間近になって、村長が課長の案内で下見に来られた。男子用トイレを見て不満を漏らされた。実は男子用トイレと女子用トイレとの間に検査室を配置した。これは、検尿コップを両サイドから小さいガラス戸こしに検査室に提出出来るようにしたのである。そのために、スペースの問題で男子用トイレに男子用便器の設置を省いたのである。大小兼務で用は足りると思ったので

ある。村長の不満は、男は男子用でなければやった気がしないと言うことであったと課長から報告を受けた。後の祭りである。まあいい。隣の保健福祉施設のトイレには男子用便器がずらりと並んでいる。そちらで気晴らしをしてもらうことにする。

村長の肝いりで診療所の周りには、黒木の幼木がずらりと植樹された。削られた土手の斜面に数百本のつつじの苗が植えられた。ここは海抜20数メートルの高台にある。15メートルの津波が押し寄せても大丈夫である。海岸沿いの集落の避難場所としても良いだろう。東北では多くの病院や診療所が災害に会った。東北各地にいる級友達も被災は免れたものの診療に追われる毎日という。県内からも多くのドクターやボランティアが馳せ参じた。新しい診療所で、平穏に診療していることに後ろめたさも感じる。みんなの心は東北にある。テレビのインタビューで、マイクを向けられたスポーツ界の人達や一般市民も、自分の出来ることを一生懸命やることが東北の復興につながってほしいという。私もそうしよう。本年1月号の本誌に干支に因んだ駄文を書いたばかりである。あと一周りは無理としても、半周くらいは走ろうと思っている。

郷里の偉人伝
―医師・遠藤朝英（俳号石村）―

沖縄県総合保健協会
金城　忠雄

糸満市南山城跡から県道7号南へ2km、真壁城跡寺山と称する小さな公園がある。その一角に、俳句の「遠藤石村句碑」が建っている。
「製糖期の日がどっしりと村つつむ」

句碑の主が、同郷糸満市真壁出身の医師で俳人「故遠藤朝英」俳号は「石村」その方である。昭和31年（1956）から「琉球俳壇」の選者として活躍し、昭和52年（1977）帰郷中に急逝するまで21年間の長きにわたり選者を担当した。没後、昭和54年（1979）「遠藤石村賞」と「遠藤石村句碑」設立された。沖縄俳句界には絶大な貢献をなされている。

遠藤朝英先生(66歳)
医師・俳人
耕道書道名誉会員
昭和49年　元旦

（糸満市真壁には、私の実家があり、現在は両親も亡くなり仏壇だけの空き家になってしまったが、土・日、週一回の線香灯しと、盆正月・年中行事には家族が集まるようにしている。）

一方、医師としての故遠藤朝英は、「沖縄医療保険制度」創設に関して当時の稲福全志県医師会長に協力し日医武見太郎会長の下、常任理事の立場で献身的な貢献をなされている。

平成12年県医師会発行の「沖縄県医師会史―終戦から祖国復帰まで―」を読み感激、同郷の偉人として尊敬と憧れをもって紹介することにした。

当時の豊かでもない同郷の大先輩が、沖縄県の俳句界と医師会に大きく貢献した情熱とその業績を辿る。

「遠藤朝英」は、明治40年（1907）　真壁

間切り生まれ、幼名は、翁長蒲太郎「うながぬカマー」と呼ばれていた。上京後、遠藤家との養子縁組により改名したようである。

少年の頃、農家の砂糖キビ作やイモ作の生活では、豊であるはずがない。古老の話によると、父は日雇い労働、兄はハワイに移民、本人はよその家の子守と、赤貧洗うがごとしそのものであったらしい。子供をおんぶしながらも、本は手離なさず本好きとの評判だった。「チンシーフルク」今で言う「膝関節炎」その激痛で泣き叫んでいたこともあった。

そんな家庭環境でも、成績抜群なので特待生となり、奨学金で沖縄県立一中に進学できた。貧乏ではあっても優秀な子弟には、奨学金をあたえて進学させる心意気は立派であり感激する。

当時沖縄県立一中には、平良幸市元知事は同期生、医療界においては、稲福全志元県医師会長の先輩にあたる。

東京慈恵医大への進学後も特待生で授業料は免除されたが、大学時代の生活には、ハワイの兄からの援助もあった。生活費の足しにと髪の毛を売ったり、五反田から新橋の慈恵医大まで4km歩いて通ったらしい。

慈恵医大の研究では、耳鼻咽喉科を専攻しアレルギー学に精通、当時の日本では斬新的なハウスダスト抗原性の研究で医学博士を授与された。減感作療法を実施した極めて数少ない医師の一人であった。

大学の研究活動の後、東京品川区五反田で耳鼻咽喉科を開業し咽喉頭部の専門医として診療に従事した。声のお医者さんとして名声高く、春日八郎、江利チエミ、高嶺三枝子など多くの歌手の主治医を勤めた。沖縄出身の歌手仲宗根美樹、大空まゆみ、作曲家「お富さん」の渡久地政信などとは家族ぐるみのつきあいであった。森英夫のペンネームで歌謡曲作詞家でもある。ちなみに、夫人の故竹代さんはキングレコード専属歌手である。

復帰前の沖縄保険制度創設事業では、県医師会稲福全志会長に、東京から労を惜しまず献身的精力的に協力助言なされた。日本医師会武見太郎会長の下、常任理事の立場で、頻繁に来沖して日本の医療保険制度の欠点を指摘しつつ、医師会や米国民政府、琉球政府、立法院議員に助言指導する姿は、尋常ではなかったと稲福全志元会長は述懐している。

昭和52（1977）年4月30日、沖縄で慈恵医大の同窓会があり、当時4階建て米国民政府おさがりの沖縄県庁を、県立一中時代の同期生平良幸市知事にご挨拶のため訪問された。当日エレベータは故障、義足での階段は辛かったようである。自身の俳句に「義足のきしみ夜半も曳きずりきりぎりす」とあるように、左大腿骨炎の古傷あとから「腫瘍」が生じ、左脚大腿中央から切断手術され、義足であった。

東京でクリニックを開業しているご子息の話によると、沖縄県庁4階の階段を降りたところ、ロビーで急に苦しみだし「稲福先生を呼んでくれ」が最後の言葉だったらしい。稲福先生とは、医療保険問題で苦楽を共にした稲福全志元県医師会長のことである。おそらく心筋梗塞と思もわれる急死であったと述懐されている。享年69歳。

故稲福全志会長は「遠藤石村句碑」除幕式で、遠藤朝英先生は、69歳の早世であったが、多才で普通の人の何倍も活動し、故郷の沖縄のために力の限りを尽くしてくれたと挨拶されている。沖縄県医師会史の苦労話しと併せ読むと胸が詰まる思いである。

私が三和中学生の頃、10周年記念式典のおり来沖、学問に国境なしと、励ましの講演と同時に遠藤朝英作詞、渡久地政信作曲の贈られた校歌は、今もなお歌い継がれている。

「太平洋の　汐鳴りに
　青空深く　澄むところ
　もえる望みを　世界に架けて
　学ぶわれらの　意気高し
　平和が理想の　われらが母校　三和中学校」

昭和38年日本医師会最高優功賞受賞。
没後、勲四等瑞宝章叙勲を受章。
郷里の偉人―医師・俳人「遠藤朝英石村」―尊敬と憧れをもって紹介した。

チョコレートは進化するのか

琉球大学医学部附属病院皮膚科
細川　篤

緑蔭の涼しいところで、頭を冷やして、最近、特に気になることを考えてみた。

最近、この数年間、進化したチョコレート、進化するラーメン、進化する○○科学書ーーーーーなど、進化という用語が頻繁に、日常的に使われるようになった。ダーウイン生誕200年周年記念が関係しているのかもしれない。

「進化」と「進歩」「発展」ーーーなどと混同しているのではないかと考えられる。

進化は、ある種（species）が他の種（species）に変わることを意味する仮説で、ある種から他の種への移行を実証する科学的証拠が一つもなく、進化論は「論」「仮説」であって、科学的な裏付けがないことを、明治維新後の動物学者E.S.モースらによる教育もあったことなどをあらためて思い出す必要を感じた。私も生物学科（動物学）卒で、進化論にかぶれていた。そして卒論では進化論を証明しようとして別の結果が得られた経験がある。幸い2つ準備していたので他の卒論が受理された。

しかし、毎日、繰り返し、何度も「進化した○○」、「進化する□□」ーーーーーと見聞きしていると、ほんとうに進化があるように思われてくるから不思議だ。少なくとも、科学者は「進化」という言葉を慎重に使う必要があるのではないかと思った。

また、新しい進化論、ネオ・ダーウイニズムなどどいう表現なども基本的には同じものなので惑わされないように気を付けたい。気を付けるといってもピンとこないかもしれない。例えば、ネオ・ナチズムなども気を付けたい。ヒットラーが熱心な進化論者だったこと、多数の肢体不自由者や精神に障害のある人々を抹殺したこと、レニングラードで敗退した際、彼の「スラブ民族はゲルマン民族より優れていた」という発言、ホロコーストなどを忘れないようにいたい。

これだけ、進化という言葉が日常生活に浸透した現在、この理論（仮説）の本質を、特に医師を含め科学者はシッカリ吟味し、用語の誤用について世論を修正する立場にあるのではないかと思ったりした。

世界経済、特に日本経済（医療経済も）、テロや地震多発傾向と原発を含む環境問題、民族紛争ーーーこれまでに、ヒトが経験しなかったことを体験する状況にあって、今年の夏は、いっそう暑くなりそうです。だから、時には、自然のなかで自分を取り戻すゆとりをもちたい。

ワッ　大変だ

辺野喜内科・小児科
辺野喜　英夫

3年前のあの日もいつものように愛車にて職場に向かっていました。天気のとても良い日で、ふと見上げた青空に糸くずのような物が1本見えます、あわてて目を擦っても消えず目の動きに合わせてふわふわと移動します。片方ずつ目を閉じてチェックするとその物は右目に在ることが判り、私の頭の中で飛蚊症という言葉がひらめく。そうすると急に気がかりなことが浮かび、職場に着くと現像用の暗室に飛び込

む、一瞬視野の片隅にピカット光が走る。やはりある、光視症の症状だ、飛蚊症と光視症の症状が揃うと高頻度に網膜裂孔がみられるのであわててインターネットにて調べる。英国の眼科救急病院のデーターでは両症状がある場合24.6％に網膜裂孔がみられたとある、私の頭の中を網膜裂孔、網膜剥離との言葉がグルグルと駆け巡る。診療が午前中だけの日を待って早速眼科を受診する。医学生の時、眼科実習の際片眼に散瞳剤を点眼し自宅に帰る途中、妙に眩しく最初は片方の手のひらで眩しい方の目を覆いながら歩いていたが、バランスが悪くどうにも歩きずらい、しかたがないのでそれ以降片目を閉じながら歩いてアパート迄帰ったのを思い出し、今回眼科へはタクシーにて行く。受付を済ませ待合室で待つも、職業柄病院待合室には慣れているはずなのにどうにも落ち着かない、しかたがないので月遅れの雑誌を手にするも活字が目に入らず、写真だけを目で追う。やがて若い男性スタッフから呼ばれ問診を受ける。私の話を表情も変えず淡々と記録してゆく、糸くずや、暗闇で光が見える話をしても無表情に記録しているので、ここは大事なポイントだぞちゃんと書ているのかと気になる。続いて視力検査など診察前検査を受ける。その後中待合でしばらく待っているとベテランらしき看護婦さんが来て手際よく散瞳剤と思われる物を両目に点眼する。やっと診察室に呼ばれ中に入ると、中堅らしき女医さんがいて小難しそうに私のカルテを読んでいる。女医さんは顔を上げると「辺野喜さん視力は随分良いようですね」と話しだした、そう視力は私の自慢の一つで、自院で診療中も度々患者さんから「先生よくそんな細かい字が読めますね」などと褒められる。しかし軽い乱視があり安全運転のため、運転中はなるべく眼鏡を使用するようにしていた、しかも日中は度付サングラスを使用し目の保護には気を付けていた、なのにどうしてという気分になる。次に眼底検査、顎を検査台に置き顔を固定され、後はまな板の鯉状態である。7分程度で検査終了。じっと女医さんの顔を見る、女医さんは「後部硝子体剥離ですね」と明るい口調で話す。あわてて網膜裂孔と網膜剥離はないか確認すると、「ありませんよ」との返事、全身の緊張がとけていくのがわかる。診療終了後ベテラン看護婦さん再度登場し縮瞳剤らしきものを要領よく点眼しその日の診療終了。しかしその後帰りのタクシーの中で原因を考えると加齢ぐらいしか思いあたらず少し落ち込む。自院に戻り点眼薬の影響がなくなる迄2時間程仮眠した後帰宅し、私の長い1日はやっと終わる。その後2回ほど経過観察のため受診し、「なにか異常があったら早めに又いらして下さい」と言われ通院終了。

通院終了後一か月ぐらいで暗闇の光は見えなくなる、網膜と硝子体の癒着がなくなった為なら網膜裂孔の可能性が減りうれしいなと思う。糸くずはその後3か月ぐらいはほぼ毎日チェックしていたが変化なく、そのうちあまり気にならなくなり、気が付くと1年半前より糸くずは見えなくなっている、不純物が吸収されて消失したのならうれしいが、剥離した硝子体後方の膜が眼球の前方へ移動し網膜から遠くなり、単に影が薄くなり気にならなくなっているせいかもしれないので手放しでは喜べない。

一年前通販にて白内障予防のため開発されたとの宣伝文句の偏光レンズ付きのサングラスを見つけ早速購入する。オーバーサングラスで眼鏡上からも使用でき、サングラス横のテンプルの部分も幅広く作られて横からの光が遮断できる優れ物だ。かなり気に入っており日中の通勤時に使用している、これで有害な紫外線や青色光が防げ今後少しでも加齢性変化が防げたら良いと期待している。

食事もカロリーオーバーに気を付けつつ、ビタミンC、E、βカロチン、ポリフェノール、ルテイン等を積極的に摂っていこうと思っている。

老化は最初に目から来るとの言葉は良く聞きますが、加齢に伴う目の変化の多彩さには改め驚かされ、目の大切さを痛感しているところです。

開業16年を振り返って

平田内科医院
平田　清司

最近、医院の新規開業の新聞広告を拝見する事が多くなりましたが、ふと、小生の開業時の事を思い出しました。

10年程の勤務医を経て、平成7年4月に現在地（旧大里村字稲嶺→現南城市）に開業しました。それまで、1年程色々リサーチ等をした後に、大丈夫と判断して開業し、診療初日、夢と希望とやる気満々で診療に臨みました。しかし、来院患者数12名、1週間後も変化なく「まあ、1週間しか経過してないのでしょうがないか」と自らを慰めていましたが、1ヶ月、2ヶ月、さらに6ヶ月経過しても、患者さんは増える気配はなく、いよいよ、不安と焦りが交錯しました。新聞のチラシ等も配りましたが、なかなか状況は好転せず、毎日の様に医院の玄関に立って、患者さんの来院を待っている事も度々ありました。開業前に、あれこれ思い描いた夢は完全に打ち砕かれ、「これから先、患者さんは増えていくのだろうか」等、現実の厳しさを思い知らされる日が続きました。反面、患者さんとの診療時間を長く持つことが出来、病気の話しや世間話等を交えながら診療する事が出来ました。その後、患者さん同士の口コミ等で、2年目は患者さんの数も増え、3年目からは順風満帆に経過しました。勤務医時代にはなかった患者さんとの距離が、より身近になり、又、風邪で受診した患者さんから「先生の顔を見たら、風邪は治ったみたい」。「先生に会いに来たよ」等々、お世辞だとわかっていても内心、嬉しいものです。時々、手作りのパン、サーターアンダーギー、天麩羅、取立ての野菜等の差し入れ等もあり、「少しは、地域の皆さんのお役に立っているのかな」と、ちょっと誇らしげに思ったものです。しかし、よい事ばかりではありません。数年前より、後発品が発売された時に、当院は、後発品の処方が他院より数ヶ月遅れた事が、一部の患者さんから「当院の処方薬が高い」という噂が広がり、まして地方は横の繋がりが強いので、診療にも大きく影響する事が多いという話を聞いていたので、心配しましたが、大事に至りませんでした。地方では、こういう事も肝に銘じておかないといけない様です。又、「スタッフの○○さんは、最近愛想が悪い」「診療までの待ち時間が長い」「採血したら大きな皮下出血になっている」等、電話でお叱りを受けたり、色々な事が起こります。

腰痛、膝関節炎等で受診する患者さんもおり、専門性が要求される時は、整形外科を紹介したり、明らかに深い切傷を認めるのに当院を受診し、再度外科を紹介したり、地方では都会と違って専門性よりは、総合的な医療が要求される事もあります。

又、地方の医療は景気の動向にも左右される様に思われます（最近の不景気で、検査を拒否する患者さんが増えている様に思われる）。いずれにしても、これからの医療はサービス業の一面もあるので、その事についても考えないといけないのではないでしょうか。

小生の医院も、開業16年を迎える事が出来ましたが、これは地域の皆様、スタッフ、その他関係者各位のお陰だと感謝しております。今後も微力ながら地域医療に貢献出来る様に頑張っていきたいと思います。

愛と憎しみ

嶺井リハビリ病院 内科
比屋根　勉

父は明治43年に中頭郡美里村に生まれ7男1女の7男で末っ子であった。性格は日頃は温和で内気。美里尋常小学校（中頭病院の近く、沖

縄市知花と登川の間にあり現在は昔の奉安殿が残っている）を終え、昔美里にあったといわれる山本医院で薬局に勤めていた（恐らく助手であろう）。動機は聞き損ねたが、20歳代の昭和初期の頃にダバオに移民し（恐らく当時の沖縄は不況で生活できず、また一旗挙げるつもりで移民したかも知れない）、マニラ麻の麻山の開墾にたずさわる。入植地の地名はミンタル耕地ともワガン耕地とも聞いた覚えがあるがはっきりしない。自分での開墾ではなく恐らく先に入植した沖縄県人の所で働いたと想像される。昭和16年の開戦時は現地召集を受け衛生兵の教育を受けダバオ駐屯の第100師団野戦病院に勤務し戦中はミンダナオのジャングルを逃げ回り衛生兵だったため弾は一発も撃たなかったらしい。当時一緒にジャングルを逃げ回った加藤さんという元上官に30年前東京でお会いした事があるが（加藤さんは会社員だったので、軍医ではなく恐らく学徒兵で衛生隊の幹部だったか？）、敗戦時に米軍に投降する時に加藤さん達から、君達は現地招集で元々兵隊ではないのだから民間の収容所に行きなさい、と言われ部隊から離れ一民間人としてダリアオン捕虜収容所に収容されたらしい。福岡に引き上げた後同じ引き上げ組の母と一緒になり沖縄に帰るが、トラックで故郷の美里村登川に着いた時、松比屋根のウメーと呼ばれていた親戚のお婆さんがトラックから降り立った父を見つけ、トゥクー（徳と言う父の童名）がけーとーんどう！！と驚きと喜びにあふれて近所に知らせ回ったらしい。村内（むらうち）の屋号かまーめーんとう（蒲前武当？）という家の座敷を借り戦後の生活が始まった。小生は父の40歳時にそこの座敷で生を受けたのであるが一度お尋ねし御挨拶に行こうと思っているのだがまだ果たしてない。戦後の一時期は父達が酒を垂れて母がそれを米軍の野戦用の水筒につめコザまで持って行き商いをしたらしく、母曰く、父は酒を垂れる時になみやーなみやーして味見をしたらしく、母によるとその時が父の酒の飲み始めらしい。父の酒癖について実感し意識し始めたのは小学校の6年から中学生の時であろうか。普段は穏やかであまりものを言わずよその方からはあんたのお父さんはいい人ねーと言われたりもしたが、夜になり酒を飲み始めると朝まで寝ずにくだくだと母に対してか誰に対してかわからないが時に大声で文句を言い、僕ら兄弟が学校に行く頃にやっと寝始めると言う記憶がある。中学校から高校の頃までも父の酒癖は変わらず、夜の父のわめき声で寝つけない日はそれなりに耐え難いものがあった。普段は私達兄弟とは会話はあまりないが酒が入ると勉強しろ勉強しろと言い、あげくの果ては勉強中に部屋まで入って来て、本人は普段会話不足と思っての事か会話を求めようとし酒臭い息でくだくだと説教し結果的に勉強のじゃまをされた時は本当に頭にきた。父のその様な酒が続くと中学生の小生としてはいわば酒乱の父への憎しみがつのるばかりで腹いせに首をくくって死んでやろうかと思う事が何回もあった。酔っ払いながら“親は親足らずとも子は子たるべし”と言っているのを聞くとこの野郎！勝手な事を言って！と軽蔑の念が湧き上がるのであった。高校生のある夜、家に帰ると既に酔っ払った父が何か文句を言いワーワーと訳のわからん事を言いつのり、小生に対しても何かわめいていたので頭にかっときて、“この野郎！お前はそれでも親か！”と言いながら投げとばして後ろからはがい締めにし柔道の帯で後ろ手に縛り挙げてしまった。後日親戚のおばさんが家に来て母に対して、あんた達は父親をすそーん（粗末に）している、と小生には何も言わず母だけを責めているのには参った。側で聞いていてこのおばさんは父の酒乱のひどさが何にもわかっていないなと思った。タバコは吸いたい放題でヘビースモーカーであり、その様なじままな生活が続いていたので父には尊敬の念は全く湧かないし、勉強しているかと言われると、酒くぇーふらーが何言うかと反発がつのる一方であった。ある朝登校前に母に“父ちゃんがうなって苦しんでいるよ”と助けを求められた時は“又酒飲んだだろう！放っとけ！”と言い無視してそのまま登校した事もあった。当時

60歳代の父は80代の老人の顔をし、比べて父のすぐ上の叔父さんは若若しく、酒とタバコの害は子供心にも感じられ、今思うと免疫力が大分落ちていたのであろう。父が70歳代になると、小生にも既に子供ができ多少は親の気持ちがわかる様な年齢になっていた。その頃には父の酒量は減っていたがタバコは相変わらずであった。78歳のある日呼吸困難で病院に運ばれ肺癌疑いで入院となったが結果は果たして小細胞癌であり末期で抗癌剤投与は不可能な状態であった。父の最期は呼吸苦との闘いであり苦悶のうちに死んだので肺癌の恐ろしさをじかに見てタバコをやめる必要性を痛切に感じた。あれ程反発し憎んだ事もあった父ではあったが、死後時どき見た父の夢は、例えばある夢の1シーンだが、遠くから歩いて来る父を見て父ちゃーん！と大きな声で呼び手を振って走り寄る子供の自分がいて、夢から目覚めた瞬間、あーこれは夢なんだ、自分も父への愛情はあるんだとほのぼのとした気分になって又寝入ると言う事があり、肉親への愛情を実感したのであった。兄弟で父の話になり、あの頃の親父の酒癖のひどさはなかったと言うと弟は親戚や地域の皆さんは父は人情持ちで悪く言う人はいないよと言い、また妹はよその家庭では父親の暴力で外へ逃げ朝まで母親と外に隠れたと言う話も聞くからうちはまだいい方だったんじゃないとか言うし、年上の従兄弟はあんたのお父さんは戦争中での大変な苦労があるからあの様に飲んでしまう事情があるとか、また早くに父親を失った別の従兄弟は父親がいない生活の苦労を語り酒飲みでも父親はいるだけでもいいとその存在の有難さを強調した。それに対してあの頃の父の行状を考えると自分にはその様にはとても思えないわだかまりがあった。父との関係としては弟達より自分の方がそれだけ深かったのであろうか？少年がいだく理想的な父親像とのあまりに違いすぎるギャップ、あるいは私達子供に無私の愛をささげてくれる母との違い。少年から青年へと成長する子供とはねじれた接し方しかできない父親とそれに対する少年の反発。父親に対する強い対抗心を抱いたいわゆるOedipus Complexの部分的な撥露だったかも知れない。父親への愛憎ないまぜの気持ちで成人した小生としては父を反面教師として父の様な酒は飲むまい、子供達にはあの様なぶざまな姿は見せまい、と思ってきた。タバコを止めて15年になるので、78歳で死んだ父の年齢を超え80歳代まではそれなりに大丈夫ではないかと変な自信めいたものを持っている。父とは違い酒はほどほどに飲んでいるしタバコはとっくに止めて元気なので今後は仕事に励みながら、時にはボランティアに行き、いつかはアフリカ大陸一周や南米大陸一周の旅に出てみたいと思っている。

お墓をつくる事になった

和ウィメンズクリニック
赤嶺　和成

小禄を含め南部地区には門中が多い。

門中とは沖縄だけでなく中国・朝鮮半島・ベトナムなどの一部に見られる父系の血縁団体の事である。御酒手（ウサカティー）という分担金を収め決められた行事に参加し、死んだ後は門中墓という御先祖様の祀られた墓に入るという仕組みだ。この一例が総勢5,000人といわれている糸満の幸地腹・赤比儀腹一族による幸地腹・赤比儀腹両門中墓で門中団結の象徴となっている（写真1）。門中家系はあくまでも女系や他系が混ざるのを拒み、女性は結婚や離婚、又訳あり死亡によっても墓に入れず、それに継ぐ事も許されないそうだ。しかも継続相続は長男優先であり、父系のこだわりがあって娘婿はありえないようだ。

帰省して初めて親がこれまで門中へウサカティーを納めていた事が判った。子供の頃は清明際で遊んだ思い出もあったが、東京では門中の

写真１

事を考えもしなかったので、平日にもかかわらず皆さんが行事に参加する事にカルチャーショックを受けてしまった。

それまで僕は沖縄の暑さと仕事の忙しさにかこつけ、首里拝みと七夕の前の墓掃除に参加する事で義理をはたしたつもりでいた。

ところが平成元年開業の年に門中行事担当番である（ムイメー）に当たった時、認識の甘さを思い知る事になった。夫婦２組でその責を担ったわけだが、平日仕事を休めないためかみさんに負担を掛けざるを得なかった。困った僕は元家（ムートゥヤ）に行事内容と日程の再考をお願いしたが殆ど変更は出来なかった。

とはいえ地元で開業したので責任を放棄する訳にも行かず、必死に１年間全うしこれでムイメーを終えたつもりでいた。ところが数年後の当番表に自分の名前を見つけた時正直驚いた。我が門中の家族構成を考えたら担当はありえないはずだった。何故このような事が起こるのか。本当に門中の運営管理はしっかりなされているのか。そうした門中に対する疑念は深まる一方だった。そこで止む無く予てから考えていた事を実行に移す決心をした。そう、お墓を作り門中を抜けるしかないと。

先ずひたすら門中について調べた。いろいろ読んでみると少しずつ門中の概要がみえて来た。門中には父の告別式を含め大変世話になった。しかし時代を考えると誰もが負担なく参加出来るようでなければ何れ破綻するだろうなと思えてきた。それを一朝一夕で変えるのは難しく、僕は門中から独立し墓を作る意思をさらに固めた。

今年の初起こし（旧１月２日）に父の洗骨（カチワリ：安置された骨壷から火葬された骨を出しご先祖の骨と混ぜる事。合理的にされる事もあり門中によりその時期は異なる）が門中で決定された。それを絶対に避けたい母と弟の協力も得られる事になり、先ず墓地の選定から始めた。ネット・新聞広告・本を読んだが、候補地の少なさと値段の高さに驚きながらも、母とかみさん、時に弟も一緒に墓地の見学に行った。最終的に立地条件の良さと公益法人である事から糸満の清明の丘に決めた。交渉に入り、同時に内地の弟達の意思を確認して家族全員の意見で契約にこぎつける事が出来た。

下準備が整い、いよいよムートゥヤへ報告する事になりそれを弟と母に託した所、条件が出た。それは伯母とその従兄弟に了解を得る事だった。役は僕が受け日を変え各々に説明し事情を解かって貰えた。有難い事にそれからも従兄弟は何かと僕らの援護をしてくれた。

次に門中の皆さんに説明し了承を得る段階になった。

３月のある土曜日、門中の主だった皆さんにムートゥヤに集まって貰った。話し合いは前例のない事だったのでそれなりの覚悟と緊張で臨んだ。ところがあっけない程に短い時間で終わり、お墓のお参りも許して貰えた。その際触発されたのか我々の事以外にも多くの問題提議があり、今後の門中のあり方を話し合う為に委員会を発足させる事も決まった。それは門中を離れる僕らにとって本望だった。

今回はとてもうまくいった一例に過ぎないと思う。従来ならその難しさに諦めたはずだった。洗骨（カチワリ）を避けたいという母親の強い気持ちと門中の皆さんが変わって行く未来を汲み取ってくれたからだろう。

今夏待望のお墓が完成する。納骨式には内地の弟達も参加する事になると思う。それを一番楽しみにしているのはやはり母に違いない。

夏山の思い出

琉球大学医学部附属病院 手術部
久田　友治

大学生時代はワンダーフォーゲル部に所属していた。入部の理由は、沖縄にはない山への憧れと手足の器用さが要らないことだ。器用さは要らなくても、体力は必要であった。教養部キャンパスの後にある小高い公園まで走って上った。歩荷（ぼっか）と呼ばれる、他の部員や砂袋を背中に担いで長い階段の昇り降りを何回もこなした。実は入学時の体力測定で“劣る”と判定され、初めの体育は特別クラスであったが、これらの訓練で足腰は人並みになったと思う。練習後に緑の木々に囲まれた公園で飲むビールは何とも旨かった。新人歓迎コンパで飲まされた甘ったるい二級酒とは違い、麦の味がした。もう一度味わいたいが叶わない夢だ。

福岡に住んでいたので、どうしても九州の山へ行くことが多かった。九州の山は険しい所がなく、女性的である。写真1は何度も行った九重山系。リュックの中は2リットルの飲み水を入れたポリタンク、寝袋、ガスコンロ、食糧として米や野菜、塩漬けにした安い豚肉、高野豆腐・・・。メニューはたかが知れているが、豚汁、チャーハン、炊き込みご飯など。因みに山で酒は厳禁である。山の上で質素な食生活をして平地に下りて来ると、学生食堂で食べる素うどんでも旨かった。

写真1

1年の時の夏合宿では奥秩父から八ヶ岳を歩いた（写真2）。北アルプス、南アルプス、北海道へと行く他のグループの先輩から「この縦走は長いぞ」と脅かされた。それはウソではなく、十日以上かけたこの行程は実に長かった。山では午前3時に起きる。ご飯と味噌汁そしてメザシの朝食を終え、テントをたたんで、夜明け前には出発だ。夏山では雷が鳴る前に次の宿泊地に着かなければならない。ひたすら上って、上って、また下るだけだ。合宿後にドイツ語の試験をひかえていたので、苦しさを紛らわそうと、デア、デス、デム、デンと唱えながら登った。しかし、歩荷で鍛えて人並みになったはずの足腰では充分ではなかった。汗をびっしょりかくので、喉が乾いて水を飲みたくなる。

写真2

しかし、先輩から水は飲むなと厳しく何度も云われた。“水を飲むとへたばる”というのがその理由であり、今になって思うと、そんなエビデンスがあったのかと恨めしくなる。その頃はEBMがなかった。そして、山の水は掛け値なしに旨い、冷たくて何かあまい味がする。喉が強烈に渇くので「うがいです」とごまかしながら、ポリタンクの水を飲んだ。

昨年「中高年のための青春18切符」との本に触発され、小海線に乗った。小海線は八ヶ岳高原線とも呼ばれ、長野県の小諸から山梨県の小淵沢まで走る。中高年と云えども時間がないので長野新幹線を利用して途中の佐久平駅から乗車した。鈍行に揺られながら、二十歳前に登った神々しい八ヶ岳を遠くからではあるが、眺めることができ、久しぶりに感動した。

アジアが生んだ精神科医の巨星
～林宗義先生を偲んで～

山本クリニック院長
山本　和儀

敬愛する台湾ご出身の林宗義先生が昨年7月バンクーバーで他界された。これまでのご指導に感謝し衷心より哀悼の意を表します。

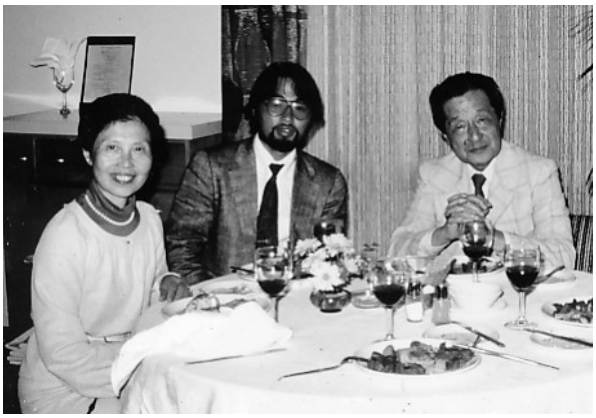
私が初めて林先生にお会いしたのは、1985年の春、沖縄県立宮古病院へ赴任して地域精神医療に取り組んで間もない頃でした。世界精神保健連盟（WFMH）終身名誉総裁の林先生と当時の精神科臨床のスター教授、神戸大学精神科中井久夫先生が、宮古と八重山をご訪問されるとの話を、朝の会議で上司の真喜屋浩医長から告げられました。急遽、外来診療を大急ぎで終えて自宅に戻って着替えを準備して、午後の飛行機に乗って沖縄本島へ渡り琉球大学医学部保健学科で林先生のご講演を拝聴しました。その晩、病院の事務長にかけあい、宮古病院精神科挙げての歓迎昼食会の開催と、院内講演会の開催の許可を取り付けることができました。翌朝の第一便で宮古島に戻って診療の傍ら、先生方のご来院の準備を進めました。林先生はお隣の台湾の出身ですが、東京大学医学部に学ばれ、日本の敗戦により台湾に戻られて、若干20代で国立台湾大学の精神科主任教授に就任されました。教室をリードされて多くの人材を育てながら、精神疾患の疫学調査や地域精神医療システムを築かれた後、WHO勤務、米国での教授職を経て、カナダのブリティッシュ･コロンビア大学の教授に御就任され、バンクーバーに新しい地域精神医療システム（GVMHS）を展開されておられました。その頃の私は精神科医になって5年目で、林先生の「分裂病は治るか」と「精神医学への道―東西文化に跨って」を愛読し、林先生の輝かしいご活躍を羅針盤にして修業を積んでいました。この憧れの先生が宮古島を訪れる滅多にない機会に、病院挙げての歓迎会と中井久夫教授の講演会を開きたいとの強い思いから、一度は外された飛行機のタラップを再度装着してもらって、ようやく沖縄本島に渡ったのでした。空港スタッフに2回も断られたのにもかかわらず、3回頼みこんでようやく実現することができました。このような行動は、一生の間に一回限りですが、夢はあきらめなければ、実現するというのはこのことだと思います。この林先生に対する思いと行動のおかげで、翌日には自身の自家用車で林先生ご夫妻を宮古島中ご案内しながら、ご指導を直接受ける栄誉に浴したのでした。車中でたくさんの質問をお受けし、応えられないことも多々ありましたが、ソクラテス問答のように、これからの仕事の進め方、生き方について示唆に富むお話の聞けた濃厚な時間でした。

翌年には琉球大学保健学科精神保健学石津宏教授のお勧めもあり、名嘉幸一講師が留学されているブリティッシュ･コロンビア大学を訪ね、GVMHSの見学をさせていただきました。当時の我が国の精神医療は精神分裂病に対する偏見や悲観的な考えに覆われ、精神病院に長期間収容するのが一般的でしたが、バンクーバーモデルは、長期収容ではなく、ずっと家庭だけで診

るのでもなく、短期間、病院に入院させて治療したら、後はしっかり地域で診て行くというシステムでした。国境や文化・さらには時間が変われば、精神医療は変わるとの信念が生まれ、精神科医療の未来に希望が見えてきました。先生はご多忙にもかかわらず、自宅に招いて下さり、また大学構内のファカルティクラブで夕食会を開いて下さいました。その際にいただいた先生のサイン入りの御著書は私の宝物です。そのバンクーバーからの帰途、サンフランシスコ空港のレストランで偶然にお会いした琉球大学医学部精神神経科学講座の小椋力教授のお誘いで、私は1988年から教育スタッフの一員にしてもらいました。

その後、1990年には、琉球大学医学部精神神経科学講座の開講5周年記念会の特別講演のため来沖して下さり、1993年のメキシコでのWFMH大会に参加する機会にあわせ、沖縄の精神科医療関係者とバンクーバーやトロントの地域精神医療システムを見学するチャンスを与えていただきました。2000年には第6回全国精神障害者団体連合会沖縄大会が開催されるにあたり、「国際精神保健シンポジウムin沖縄」で特別講演をいただき、ユーザーを大事にした精神医療を学ばせていただきました。翌年の2001年に私は、先生の後押しもあってWFMHバンクーバー大会の席で西太平洋地区担当の副会長に就任させていただきました。4年間の在任期間中に、ブルネイと京都で開催されたWHO西太平洋地区会議でNGO代表として39カ国の保健大臣や官僚を前にお話する機会を与えていただき、また私が留学したことのあるオーストラリア・メルボルンで2003年に開催されたWFMH大会では、「Socially healthy global community」のタイトルで講演する機会を頂戴しました。

林先生との出会いにより、世界的視点で我が国の精神医療を見つめて行動し、多くの海外の精神医療関係者と交流する機会を持つことができました。若くして師と仰げる方に会えることは本当に幸せなことだと思います。林先生の人を暖かく包み込む優しいお人柄と厳父の様なご指導をこれからも忘れず、一歩でも先生に近づけるよう精進して参りたいと思います。



ファカルティクラブでの林先生御夫妻との夕食会

仏像の魅力に魅かれて

医療法人 千鶴会 名護皮膚科
金城　浩邦

今日まで、私にとって仏像とは所詮人が造った造形物であり、それ以上でもそれ以下でも無いと思っていたが、たまたま奈良県の興福寺の阿修羅像を拝見した時に、純真な少年の面影をとどめる凛々しい像に何らかしら分からない秘めた力を感じ、自分なりに仏像とは何かというと思いから、今回投稿しようと思い筆をとりました。

お釈迦さまと仏像の誕生は、紀元前6～5世紀ごろ、インドのシャカ族の王子として生まれたゴータマ・シッダールタ（後の釈尊）は、周囲の人々が生老病死などで苦しむ姿をみて心を痛め、妻子を捨て29歳で出家します。苦行の後、菩提樹の下で瞑想に入り、35歳で悟りを開きゴータマ・ブッダとなります。80歳で入滅するまで、人々に人間としての正しい生き方や、苦しみから逃れるすべを説法しました。

釈尊の遺体は荼毘（火葬）に付され、舎利（遺骨）はこの上なく尊いものとして壷などに収めて、国王らに分配されました。この舎利

や、さらには遺灰、壷などを安置するためのものとして仏塔が造られ、礼拝されるようになります。この仏塔の基壇や四方に設けられた塔門に刻まれた仏伝彫刻が仏教美術の起源です。

多種多様な仏像は、それだけ救われたい心がたくさんの仏像をうみ出し、仏像の美は信仰の対象であり、芸術的見地からのみ鑑賞すべきではないという考え方もあり、美の基準はさまざまで、まず造形として優れ、それは仏像が時代時代の最も理想的なヒューマン・イメージとして、心と技を尽くして造られていることが多いからだといえると思います。すなわち、信仰心と時代がもたらす美なのです。しばしば仏像に手を合わせ、願い事をする人々が多いのですが、それはどうでしょうか。

結論から先にいえば、願い事をするかしないかは個人の自由に属する問題です。実際、寺院に行けば、そこで祀られている仏や菩薩は、交通安全から安産・子育て、厄除け、病気回復、商売繁盛、学業成就と実にさまざまな願い事を受け付けてくれています。ただ願い事をする際には、その仏にも願いがあるということも知っておきたいものです。

キリスト教でもイスラム教でも、神様は願えば何でもかなえてくれる都合のよい存在ではありません。仏教でも同じことです。けれども仏

や菩薩は私たちの願い事をはねつけるようなことはしません。願うなら、人々を救いたいと願う仏の慈悲にまず感謝する気持ちが大切です。

以上の事を気にしながら、全国の寺社をゆっくりと時間をかけて観て回り、それによって何らかの覚りが開けば幸いです。

台風雑感
―連想の旅―

みやぎMs.クリニック
宮城　博子

5月28日、土曜日。ソングダーがすぐそこまで来ているらしい。台風2号である。診療を早く切り上げスタッフを帰そうと思うが、その焦りを見透かすかのように診察の問い合わせや予約外の患者さんがひっきりなしだ。なにもきょうでなくても・・・と思いながら窓を見るとソング・オブ・インディアが風に揺れている。その観葉植物は6年前に台風の煽りで北西に大きく傾いたが、陽の光をたっぷりと浴び枝を自由に伸ばし元気に育ってくれた。いまでは軽やかな動きで風を上手に往なし幾度もの台風を切り抜けている。

台風の季節になると台風情報で「華南」と云う言葉を耳にする。以前からであるが「華南」の響きに未だ思い出せない記憶が刺激される。それは藤原新也の写真集をめくるときに感じる少し陰鬱な気分に似ており、イメージとしては湿った蒸気のような雨に包まれた港か田園、場所は中国よりも香港や台湾のほうがしっくりくる。陰鬱ななかに微かな光を感じ決して絶望的ではない。

ところで台湾はいい。2005年の台湾旅行は本当に楽しかった。その時も台風の進路を気にしつつワクワクしながら出発の日を待っていた。同行4人、しばらく会わずとも会えばすぐに時間を共有できる大切な人たち。台北、九份、鳥

来、そして台南。予定をたてずに直感で動く旅は眠っていた何かを引き出してくれる。時を忘れ方々歩き回った後の茶館でのひとときと香り高い鉄観音茶の味をこの先も忘れないだろう。

旅は華南からインドシナへと続く。高校生の頃から私は自分の前世はベトナムの農村の少女だと信じていた時期があり、映画や写真で椰子やバナナの木を背に早朝の靄がかかった緑の田園風景を目にすると懐かしい気持ちになった。以前ほど前世にこだわりはないが、診療所にくるベトナムの女性達にとても親近感を覚える。彼女達の控え目ではにかむ表情はすてきだ。ベトナムとカンボジアはまだ訪れたことはないが、ラオスは忘れることのできない国でもう一度行きたいと思う。ラオスで初めていただいたのは青菜餡かけの焼きそば、一口でノックアウトされ、1ヶ月の滞在で街の佇まいや穏やかな人たちに心を奪われた。その翌年の2000年から1年間はビエンチャンで暮らした。ホテル住まいだったが週末はメコン川のほとりを歩いて市場に向かい、途中寺院で涼をとりながら仏像をみて過ごした。いたるところでゴールデンシャワーがたわわに咲きほこり、4月のラオス正月にはゴールデンシャワーの花房でジャスミンが浮かんだ聖水をすくい祝福の水かけをしてくれる。6月の炎天下、初めての市場を目指して独り黙々と歩き迷子になった。いまここで倒れても誰も私のことを知らない、そう思いながら歩くうちに気持ちが解放され熱中症寸前でホテルに着いた。帰国が迫ったある日、1年間お世話になった運転手のソーフォンさんが遠回りをして緑の田園が続く長い道を黙って走ってくれた。ソーフォンさんも私も泣いた。出会った優しい人たち、おいしい食べもの、すべてがとても懐かしい。

心に残る大切な場所を再び訪れるとき、どのような思いでその風景を見つめるのだろう。その場所に立ちかつての時を懐かしみ、いま見つめる景色や風の匂いを記憶の層に積み重ね、いつか生まれ変わるときそれは微かな記憶として不意によみがえり新たな旅が始まるのだろうか。

また、どこかへ行きたい。

ワインとかわじの鮨と琉球諸
－VINOKINAWAの楽しみ－

かいクリニック
稲田　隆司

ワインの記憶をたどれば、中学の頃、海辺でキャンプをし火を囲んでいると若い米兵が参加してきて酔って半ば泣き笑いするはしゃぎ方でベトナムに行くんだと語り、その時赤玉ポートワインをラッパ呑みにしていた情景が浮かぶ。不謹慎だがその後学生時代、友人と海で泳ぐ時ビール代わりに赤玉を呑んでみた。熱い甘い赤玉と海水が混じり独特の味がした。

研修医になり先輩に初めてワインバーなるものに連れていかれた。ポアソンという店でママは確かサントリーのワイン講習を受けたとの事だった。ママの好みでベートーベンの皇帝が連続してかかり、メインはドイツの白ワインだった。音楽とワインは合うものだなと思ったがあまりワインにはまる事はなかった。呑みはするが○○ワイン、△×種、AZ産とか覚えるのも面倒で俺はワインはわからんよとうっちゃっていた。その後、東京の根津のワインバーで俺はワインはわからんと呑んでいると、ソムリエが貴方はスペインの赤とだけ覚えておけば良いですよとアドバイスをくれた。私の体質、気質を見抜いての事だろう。漢方でいう実証とみたのであろうか。それ以来、どこへ行っても大抵はそれで通し間に合ってきた。

沖縄に戻り久茂地のワインバーVINOKINAWAでその話をすると、店主の亀谷さんがまあそういわず色々と呑んで下さいよと勧めてくれ、次第にワインにはまるようになった。数週に1回グラスワインが代わり、赤白と各国のワインを教えてくれる。習うより慣れろで相変わらず俺はワインはわからんと呑んでいく内に少しずつだが、名は覚えぬが、これはこの前と違うなとか、似ているなとか、微妙な違いを感じるようになっていった。最近ではようやくブル

ゴーニュの繊細なウンチクを語る常連の会話にほんの少しはついていけるようになった。か？

ある時、ポルトガルの白がうまく、ふとこれとファドを合わすとよりうまいだろうなと思った。アマリア・ロドリゲスをBGMにかけてもらうとあたかも哀愁漂うリスボンに居るかのような気がした。久しぶりにドイツの白に合わせて皇帝をかけてもらった。研修医の頃に戻った感じがした。ワインも呑んだがよく説教もされた。ワーグナーの陶酔と赤もはまる。クレール・エルジエールという何回か沖縄にも来たシャンソンの歌手がいるが、彼女の飾らない声質もワインに優しい。モーツァルトももちろん様々なクラシックの楽曲が各ワインと響き合い調和している。ある時、マジョルカ島のワインがあったのでショパンと合わせてみた。ジョルジュ・サンドとショパンも呑んだかもしれず介護するサンドと弱りゆくショパンの心境を思った。更にある時、常連のOさんがかわじの鮨を持ちこんだ。ワインと合うのだという。それが客の間で流行り次第にどのワインとはどんなネタがうまいかと複雑な話になってきた。かわじの大将もワイン好きでこの話に興味を示し工夫を重ね、今ではどんなワインを呑んでいるから合う鮨を頼むというとビシッとうならせる鮨を届けてくれる。俺の鮨がワインに負けるかといった気合のこもった握りである。そして、この春のヒットが琉球諸とワインの試食、試飲会であった。琉球諸は一時期すたれかけたが琉球の諸の原種でサツマイモとは異なりジャガイモに似た食感でかすかな甘みを有する。年輩の方に聞くと昔は常食であったという。沖縄100号という説がある。これを食べると復帰論争で「イモ、ハダシ論」があったがーそれ故イモは貧しさの象徴とされたー、それは違うと感ずる。この諸はうまい。米やジャガイモのように常食可能で先人の食の豊かさを思わせる。十数年前に「琉球諸の会」（創主 国場幸房）ができて、建築家、学者、政治家、会社員と様々な市民が琉球諸の普及の為に活動している。年に1回総会を開き、琉球諸をつまみに酒を呑み語らい、最後は「琉球諸の旅」という会の唄（作詞 福島駿介、作曲 仲田幸子）を歌ってお開きとなる。私も数年前に入会し、苗を育てたり若夏学院の子供達の農業実習で育ててもらったりしている。一昨年はブルーシートいっぱいにとれた。去年も楽しみにしていたが不作だった。2年おきに育つという話もあるので今年は楽しみである。みそ汁の具にしても可し、直に焼いても可し、ピザの具、マッシュポテト、スープ等どれもおいしい。常連のNさんの屋上の畑でとれた諸を様々に調理し、その日は琉球諸とワインを愛する人々でVINOKINAWAは大いに盛り上がった。さて、このお店は私の感覚的な初心者遊びにとどまらず、多くのワイン好きを満足させると思う。その備えとこだわりはおもしろい。尚琉球諸の苗はお分けできますので興味のある方は小生まで御一報下さい。

VINOKINAWA：旧久茂地公民館向かい
Tel：（098）861-9527

縄文土器と弥生土器

琉球大学大学院 感染症・呼吸器・消化器内科学（第一内科）教授
藤田　次郎

物にはめぐり「会う」のだと思う。

教授室には様々な物があるが、稲嶺盛吉さんの琉球ガラスと、故島常賀氏のシーサーと抱瓶が輝きをはなっている。

稲嶺盛吉さんの琉球ガラスとの出会いは、医局の秘書さんが、冷茶用のグラスをプレゼントしてくれたことであった。そのグラスは今も愛用しているが、素晴らしい質感と涼しい色合いを持っている。

その後、2005年8月、石垣島に旅行した際に、請福酒造という店を訪ねた。酒造所であるので当然泡盛を購入するつもりで店に入ったが、むしろ目にとまったのは、店内の棚に並べ

てあった稲嶺盛吉さんの作品であった。泡盛はお土産用のもののみ購入し、一目惚れした稲嶺盛吉さん作の琉球ガラスを店主に頼みこんで売っていただき、飛行機の中で大事に抱えて帰った。その後は、年数をかけて気に入ったものを購入し、自宅で使用するガラス食器は全て稲嶺盛吉さん作のものとなった。

さて2007年9月に沖縄県企業局が企画した「第3回沖縄の水　デジタルフォトコンテスト」という催しで、中学生部門の特別賞に息子の撮った写真が選ばれた（図1）。写真は普通のデジカメで撮影したものなので、稲嶺盛吉さんのガラスの素晴らしさが賞に選ばれた最も大きな要因であると考えている。

図1　自宅にある稲嶺盛吉さん作の琉球ガラス
（藤田祐介撮影、第3回沖縄の水　デジタルフォトコンテスト特別賞受賞、2007年9月）

次は島常賀氏の作品との「出会い」である。

琉球大学医学部に赴任してしばらくしてから、琉球大学のキャンパス内に素晴らしいシーサーが2体あることに気づいた。この2体のシーサーが故島常賀氏作であることは、事務方から聞いた。島常賀氏について調べると、沖縄県ではシーサー作りにおいては、右に出るものはいないと称される、シーサー作りの名人であることがわかった。

2007年7月に、写真家三好和義氏を沖縄に招き、琉球大学医学部の風景を写真に収めてもらった。中庭や病棟の風景、琉球大学医学部の全体像の写真と共に、島常賀氏作のシーサーの素晴らしい写真も出来上がった（図2）。もちろんシーサー本体のパワーもすごいが、それに負けないだけの素晴らしい芸術的な写真であると思っている。

図2　琉球大学医学部のキャンパスにあるシーサー
（島常賀作、常賀のサインが見て取れる、三好和義氏撮影）

シーサーは守り神である。私はこの写真を、自分が学会長であった第61回日本呼吸器学会・日本結核病学会九州支部　秋季学術講演会（2008年11月6～7日）のプログラムの表紙に使った。学会期間の天気予報は雨であったが、2日間とも天候に恵まれ、11月にもかかわらず気温はどんどん上がり夏日を記録した。学会そのものも医局員の尽力で成功したが、沖縄コンベンションセンターに集まっていただいた県外の方々に沖縄の青い海を見てもらったことが嬉しかった。

学会が終了した次の日、故島常賀氏の家にお礼に行こうと思った。漫画「美味しんぼ」28巻を読んでおり、島常賀氏の自宅が壺屋にあることは知っていたものの、何の下調べもせずに壺屋に向かった。当然のことながら島常賀氏の自宅は見つかるはずもなく、壺屋の細道で迷子になった。そこで、たまたま道の片側に駐車した車から降りてきた中年の男性に、「島常賀さんのお宅はどこでしょうか？」と尋ねたところ、「なんで島常賀の家を探しているのですか？」と逆に尋ねられた。学会のプログラムを持っていたので、琉球大学に勤務する医師であることを告げ、プログラムを見せたところ、納得され、「私は島常賀の息子です。これから案

内します。」という信じられない展開となった。

故島常賀氏の自宅には、もう誰も住んでおらず、鍵もかかったままであった。中に入ると自宅は「美味しんぼ」に出てくる絵とそっくりであり、「美味しんぼ」の作者も取材に訪れたのだと理解した。自宅内には作りかけのシーサーなどがあったものの、晩年のものであるせいか、力は乏しいように感じた。息子さんは何を思ったか、2階に上がり、見事なチブルシーサーを抱えて階段から降りてきた。このような経緯で、故島常賀氏作のチブルシーサーが教授室に鎮座することになった（図3）。島常賀氏の自宅の2階に長く保管されていたものである。私は、このシーサーを「桃太郎」と名付け、可愛がっている。

図3　島常賀氏作　チブルシーサー
故島常賀氏のご自宅の2階に、長年置いてあったもの。不思議な縁で私の部屋に収まることになった。常賀のサインも見てとれる。「桃太郎」と命名した。

2011年3月11日の東日本大震災の直後、不思議なことがおこった。たまたまインターネットで、島常賀氏作の抱瓶を見つけ、出品者と連絡を取ったところ、相手は東京に住む上品な女性で、「沖縄の方で、島常賀さんのものがお好きな方ならお使いください。無料でどうぞ、送料もいりません」という信じられない展開になった。もちろん送料まで無料という訳にはいかず、震災の義援金も含めて若干の金額を後で振り込んだものの、見事な抱瓶が教授室の棚に収まることになった（図4）。私はこの抱瓶を「龍次郎」と名付け、その力強さに感嘆しながら眺めている。非科学的ではあるが、大地震にもかかわらず、奇跡的に無傷であった「龍次郎」を、教授室の「桃太郎」が、「故郷の沖縄に戻っておいで」と呼んだのではないかと思っている。

図4　島常賀作　抱瓶
大震災直後、無料で良いという東京の見ず知らずの女性から私の部屋に届けられたもの。底部には常賀のサインが入っている。「龍次郎」と名付けた。

さて私が大学時代6年間過ごした岡山には、小谷真三さんというガラス職人がいて、倉敷ガラスを製作していた。小谷真三さんの作るガラスは非常にシンプルで透明性の高いもので、稲嶺盛吉さんの泡ガラスとは対照的である。また陶器では、人間国宝を輩出する有名な備前焼の産地がある。備前焼は素焼きの非常にシンプルな陶器である。

香川大学医学部に勤務していた頃に、高松市の自宅で用いていた器は、ガラスは全てが小谷真三さん作の倉敷ガラスで、陶器の多くは備前焼であった。沖縄の生活では、ガラスは全てが稲嶺盛吉さん作のものを使用しており、陶器の多くは、小橋川清正さん作（沖縄サミットの際に使用した食器の製作者）の壺屋焼を用いている。岡山で生まれた器と、沖縄で生まれた器を比較すると、前者はシンプルで模様の少ない弥生土器であり、後者は紋様が多く立体感のある縄文土器であると感じる。何千年の時を経ても、民族の持つ芸術性遺伝子は引き継がれていくものであると考えている。

ヒト科スキゾ族天然種

ぐしかわ皮フ科
當山　兼正

僕の人生のメインテーマ（モチーフ）は自分って何？世界って何？である。

人（歩いて行くひと）は移り行く時間のなかで様々なひと、生き物、事物と出会ってゆく。

思春期の頃「河のほとりに」と「カントリーガール」しか知らなかった＜谷山浩子＞のベスト盤CDアルバム「白と黒」に最近ツタヤで出会った。聴いてみると、昔からずっと探し求めていたものに出逢えた気がした。ライアル・ワトソン、村上春樹、エヴァンゲリオン以来の衝撃であった。即日、購入して、今では毎日の様に聴いている。なかでもお気に入りの「学びの雨」を代表して紹介する。

乾いた大地にしみこむような
恵みの雨　潤す力
何もない荒れ地にも　花は咲くだろう
一粒の種がここにあるかぎり
知らない言葉を覚えるたびに
この世界を　抱きしめて行く
月の満ち欠けの訳を　記号や数の意味を
涙と諍いが織りなす　人の歴史を
色あせた一冊の本
羽ばたき飛ぶ　わたしの翼
乾いた生命にしみこむような
学びの雨　わたしは生きる
広い宇宙の中の　塵のひとひらでも
まばたきほどの　短い時間でも
わたしは生きてる　わたしの場所で
支えながら　支えられながら
いつか会えるだろうか　はるか遠い国の
どこかで生きている　まだ見ぬ明日の友達

この詩はニューヨーク同時多発テロの直後、TV等で報道されるアフガニスタンの子供達の姿を見て、感動して作ったものとの事。幼年期に遡る様なピュアでスキゾフル、広大な世界観、宇宙観が観て取れる。

その他、学生から社会へ出て行った時の心象風景を語った「窓」。この歌は、僕が学生時代に彼女の歌と知らずに聴いていた覚えがあって、三十年ぶりに再会した歌でもある。

自己の存在を見つめる自意識を語った「神様」。ドッペルゲンガーとまではいかなくとも、自己分裂の萌芽の様相を呈しており、離人的で、幼少期の僕自身ともかぶってしまう内容だ。

自ら外界から閉ざし、美しく構築された妄想世界のなかに佇む妄想族の恋愛世界を詩った「王国」。ゲド戦記のイメージを下敷きに書いたとの由。ゲド戦記と言えば、スタジオジブリの宮崎駿の子息である宮崎吾朗がアニメ化して監督デビューした作品であるが、テーマソングの「テルーの唄」の作曲は谷山浩子が手がけた。作詞は吾朗自らが作っており、彼と父親との関係が伺われるシンプルで判りやすい詩だと思う。僕の勝手な解釈だが、「お父さん、厳しいこの戦いの世界のなかで、僕は足手まといですか。付いて行って学びたいんです。」という声が聞こえてきそうである。

彼女のその他の歌詞でも、同音の繰り返しや、意外性のある言葉の組み合わせ、関係性の判りにくい言葉の使い回しがみられ、分裂圏の用語である「言葉のサラダ」や「常同行為」といった言葉が浮かんでくる。

彼女は、僕の友人の大好きだった中島みゆきと同世代でデビューし、その後も同じ様に現在に至るまで創作活動を続けている。僕のみる所、中島みゆきよりもはるかに天然度数は高い。最近、「まもるくん」という歌が、その奇妙な歌詞で、ブログ上で若者の話題になっている様だ。

新宿の地下道の壁から出てくるまもるくん
壁から生えてる　ななめに生えて笑ってる

途中省略

空から生えてきて
地表をくまなく　埋めている

以下省略

シュールである。声は癒し系の高音なのに、詩の内容は非常に奇妙でスキゾチック、幻覚タイプの内容だ。

自らのスキゾ心性を知るものは、谷山浩子に注目！である。

僕等スキゾのみちを歩むものたちは、不安に満ちた世界に生きているが由に、もっと世界を知りたいと願うものたちである。

追記

ところで、ヒト科の他族は何族？だろう？

正常族？などとありえるのだろうか？

僕には今のところ、ボーダー族と躁鬱族しか思いつかない。どちらもスキゾ族の近縁で親戚みたいなものである。昔、読んだ本によると、世の中にはシゾイドと愛情乞食しかいないとあった。愛情乞食はボーダーに相当すると思われるので～ということは～人類の大多数はスキゾ族関連？ということか？

料理とワイン

花城内科医院
花城　清治

私が、ワインと出会ったのは、20年前だったと思います。確か、赤ワインブームで恐らく、その頃からワインは日常の飲み物となりつつ、それまでは、食事をする時とか、クリスマスといった季節季節の集まりの時ぐらいでしかワインにはお目にかかる事はなかったかと思います。

それが、今ではワインの魅力にとりつかれ、ちょっとワイン通に思われてみたいという願望も味方して徹底的にコツコツと、生産地、ぶどうの種類、銘醸地、収穫年などによりこの料理にはどのワインがいいだろうかなど、自分なりにワインノートを作ってきた。これを参考に、日々の食事でのワイン選びのヒントをワイン通気取りで書いてみたいと思います。

まず、その前にワインの種類についてですが、①赤ワイン　②白ワイン　③ロゼワイン　④スパークリングワイン　があります。

赤ワインは黒ぶどうを潰してから果汁も果皮も種も全て一緒に発酵させたもの。白ワインは白ぶどうを絞って、その果汁だけを発酵させたもの。ロゼワインは、赤ワインと白ワインの作り方とほぼ同じですが、浸漬する時間を短くしたり、赤ワインと白ワインをブレンドして作ります。何となく気がつきましたか？

赤ワインは飲んでみると渋みや苦みがありますよね！これは、果皮や種も一緒に漬け込むからなんです。白ワインにはこの様な特徴はないですよね。

『こんな事ぐらい、わかっているよ』と思っておられる方もいらっしゃるとは思いますが・・・・

さて、次にワインに合ったブドウですが、ワインを造るのに適した品種は、400～500種類はあるそうです。ただ、その中でも、普段、私達が飲んでいるのは20種類程度だと思います。代表的な品種を上げますと、赤ワイン用品種としてⅰ）カベルネ・ソヴィニヨン　ⅱ）ピノ・ノワール　ⅲ）メルロー　ⅳ）シラー　ⅴ）グルナッシュ　ⅵ）テンプラニーリョなど、白ワイン用品種として、ⅰ）シャルドネ　ⅱ）ソーヴィニヨン・ブラン　ⅲ）リースリング　ⅳ）セミヨン　ⅴ）ピノ・ブランなどです。

それぞれが、味や香り色調あるいは産地、造り手によって異なります。これらのワインを料

理と組みわせる事によって、もっと食事が楽しめると思います。

でも、ひとりひとり嗜好も違うわけですから、料理とワインの相性もルールがあるわけではないと思います。

一般的に魚料理には白ワイン、肉料理には赤ワインと良く言われますが、魚料理のような淡白な味を引き立てるには白ワインの酸味が効果的で、肉料理の脂肪の味わいと赤ワインの渋みは良く引き立てあう効果があると言われています。しかし、食べたい料理に、飲みたいワインを組み合わせる、もちろんこれが一番です。飲む方の好みを優先させる事です。ただ、そんな時、ワインなんか何でもいいというよりは、その料理の味や香りを引き立てるワインを知っていれば、食事がいっそう楽しくなると思います。

そこで、私の今までの経験からワインと料理の組み合わせを簡単に紹介しましょう。

香りと色で合わせてみてはいかがでしょうか？ワインを余り飲み慣れていない方は少し難しいと思いますが赤ワインの色調から渋みとボリューム感がわかります。だいたい、ボリューム感が軽快なら渋みも軽快です。よって、ボリューム感と渋みは平行しています。ですから、赤ワインの色調からは明るい色彩のものからしだいに濃い色彩になるにつれてボリューム感が増し、渋みも強くなります。赤身の牛肉や魚（マグロやカツオ）なら赤ワイン。白身魚や鶏・豚肉には白ワイン。肉の色で選択すればいいと思います。濃い焦げ茶色の料理にはボリューム感があり、渋みも強い赤ワインを合わせるといいと思います。トマトソースを使った料理（肉・パスタ系）には軽めの赤ワインかロゼワインを合わせるといいと思います。

また、白ワインは甘みと酸味のバランスが重要で、ワインの色調も甘みが増して酸味が少ないと黄金色になり、ボリューム感が減って酸味が多ければ薄いイエローの色調がかった緑色になります。例えば、クリームやバターを使った料理には、ふくよかな甘みが増して、酸味の少ない白ワインをあわせるといいと思います。香草を使った料理にはグリーンがかった薄いイエロー系のワインが合うと思います。ずいぶんと大雑把ですが、意外に合います。また、中華やエスニック料理などには辛口のロゼワインなどとても相性がいいですよ。

しかし、慣れないうちは大変かと思いますが、ワインは料理を合わせる事により、もっともっと、食事が一層楽しくなり、料理もワインも楽しみが広がっていくと思います。

最後にワインの温度についてですが、赤ワインは冷やすと渋みが強くなるので常温がおすすめですが、冷やした方が好きという方は、それはそれで結構かと思います。白ワインは、冷やせば冷やすほど酸味が強くなり甘みが弱くなるので、例えば、レモンを絞って食べると美味しい料理には、よく冷やし低めの温度で、逆にクリーム系の料理には少し高めの温度（常温でもOK）でいいと思います。

以上、いろいろ勝手に私なりに書きましたが、まずはトライしてみて下さい。料理の味や香りを引き立てるワインを知っていれば、あなたは完璧です！

私の趣味

豊見城中央病院
玻座真　博明

私の昔からの趣味のひとつに音楽鑑賞があり、その歴史について書きたいと思います。音楽鑑賞といってもいろいろありますが、私のよく聴く音楽は洋楽です。

中学時に塾に通い始め、その勉強をするのに夜遅くまで起きるようになり、深夜ラジオを聴き始めたのがきっかけでした。家に昔からあって使用されていない古いラジカセをもらって使

っていました。DJの曲名紹介の後にラジオから流れだす、意味の分からない外国の言葉で歌われており、演奏も日本の歌謡曲より新しいものに感じられる音楽で、すぐに心を奪われました。新聞や雑誌でFMラジオの番組表を毎日みるようになり、新聞や音楽雑誌にのっていたヒットチャートの曲や新発売の曲などから聴きたい曲をチェックして、カセットテープに録音して集めていきました。雑誌はFM fan、ミュージックライフ、ミュージックマガジンなどを買って勉強し始めました。当時は1980年代前半で、マドンナやプリンス、カルチャークラブ、デュランデュランなどのアーティストが売れ始めた頃で、雑誌でもよく見かけ、ポピュラー音楽（ポップス）と言われていました。当時はCDもレコードプレーヤーも持っていなかった為、ときどきミュージックテープを買っていましたが、もっぱらラジオ放送のエアチェックが曲の主な収集源でした。

高校へ入学すると、音楽レベルが変化します。入学祝にダブルラジカセを買ってもらいました。これは、カセットテープが2個はいるラジカセです。ラジオ放送以外にカセットテープからも録音することができるようになりました。友達の持っているカセットテープの中から気になるものを借りてダビングして、私のカセットライブラリーを増やしていきました。カセットテープはSONY、TDKやmaxellなどをよく使用していました。通常の曲は安いカセットに、気に入った曲は高いカセット（メタルテープ）に録音していました。聴く曲も以前はシングル曲中心だったものが、アルバム中心となります。

大学に入学すると大きく音楽レベルが変化します。入学祝いにCDプレーヤーのついたステレオを買ってもらいました。そうなれば、レンタルCDショップを利用できるようになり、手に入れられる音楽の範囲がぐっと広がり、いままでは本のレビューでしか情報が無く、どんな曲なのだろうかと想像するしかなかったものが店中に並んでおり、大学生協店、TSUTAYAなどへ毎日通いずくめの日々が始まりました。CDは学生には高いため、CDを買って聴くよりは録音したカセットを聴くことがほとんどでした。欲しいものをさがして1日に2、3軒はしごすることもありました。そうするうちに、カセットはどんどん増えていき、数百本になりました。逆にラジオは聴く機会が少なくなっていきました。

就職するとさらに音楽レベルが変化します。自分の使えるお金に余裕ができ、また、CD shopにはレンタル店以上に多くの種類のCDが置いてあり、レンタルするだけではなく、CDを購入して直接聴くことが多くなりました。また、東京出張時にはブートレッグ（海賊版）を求めて新宿まで足を伸ばしたこともあります。ラジオを聴かなくなると、最新の曲よりは昔の曲を聴くことが多くなってきます。

次の変化はiPodの登場です。これは、パソコン内のiTunesというソフトにCDなどから曲を取り込み、iPodという小さな携帯プレーヤーに転送して、それで曲を聴く仕組みです。今までは外出時にCDウォークマンとCDを5～10枚カバンに入れて持ち歩いていたのが、これを手に入れてからは、CD何十枚分もの曲が服のポケットにおさまります。非常に楽です。また、CDケースを見なくても曲名がプレーヤーに表示されてわかるのも、非常に便利です。どこへいくときでも、なにかをしながらでも、イヤホンを通して簡単に音楽を聴くことができ、今まで以上に音楽を聴く時間が増えました。

現在の私のiPodのリストを見ると、キッス、ローリングストーンズ、AC/DC、デビッドボウイなどのアーティストの名前がならんでいます。最近のお気に入りです。CDを買う機会は以前より減りましたが、新しいジャンルを求めてCDレンタルはまだよく利用しており、私のiPodのリストもまだまだこれからもどんどん変わっていくだろうと思っています。

出会いに感謝

琉球大学医学部附属病院
野中　公子

このたび、県医師会会報に寄稿するという晴れがましい機会を得た。内容は自由とのことだがこれまでの先生方はいずれもしっかりした文章を書いておられる。私のような者が何かを書くのは恥ずかしいが、読んで下さる方の暇つぶしにでもなれば幸いである。

子供の頃、将来結婚して母親になったら、いわゆる専業主婦になって家のことをしっかりして、子供の帰りを待つようになるのだと思っていた。子供と一緒に料理したり、雨の日は傘を持って迎えに行ったり・・・。それは最も身近な大人の女性のモデルである自分の母親をみて、漠然と思い描いていた将来像であった。

ところが人生は色々あるもので、思いがけず医学部に進学して医者になり、大学院に進学して基礎研究の道が開かれた。更に思いがけず結婚、出産が叶った。多くの恩師や先輩後輩、友人に恵まれて現在の私がある。家族にも助けられている。本当に感謝、感謝である。

まだ若輩であるが、今までの人生の中で一番大きな出来事は現在進行形の育児である。今までは自分が頑張れば何とかなることが殆どであったが、子供のことではどうにもならない時があることが分かった。世間のお母さんたちの大変さを実感するとともに、我が身のことになるまで思い至らなかった自分の器量のなさを恥じ、反省している。

私は産休明けすぐに職場に復帰した。体調が安定していたことや、親の助けがあったのもあるが、妊娠中から出産後の自分の生活を具体的に考え、職場復帰の意思を強く持っていたことが大きかったと思う。育児をしながらの仕事は大変ではあるが、働いていることで生活のリズムが出来、社会とつながり所属がある安定感、そして収入がある安心感が得られている。私にとって仕事はとても大切なものである。

おかげさまで我が子は健康な方だと思うが、それでも今まで色々な病気をした。一般的な風邪はもちろん、突発性発疹、マイコプラズマ感染症、中耳炎、水痘など。その度に職場に迷惑をかけ、小児科や耳鼻科の先生にお世話になっている。disease-free な期間は2ヶ月もたないのが現状である。突然の子供の体調不良のため、週単位で進めていた研究を中断しなければならないこともあった。最近はペースが掴めて来たこともあり、家人の勤務予定をにらみながらスケジュールを組めるようになった。それでも時には仕事をつめこみすぎて結局やり直しになったりもしている。また、子供の健康に少しでも懸念があったら早いうちに医療機関を受診するようにしている。そのことで軽く済ませることが出来るし、自分の負担も減る。現在も軽い鼻汁程度であるが週2回、定期的に耳鼻科受診中である。家事は家電をフル活用。家庭と仕事の両立なんて無理と思っていたがやりようはきっと見つかる。そして何より子供の笑顔に励まされている。

今は第一線の臨床医と言う訳ではないが、それでも子供の急な病気で突然仕事を休まなければならなくなった時はつらい。その分の負担をかぶる同僚が必ず出るからである。その分どこかでお返ししたいのだが、それを果たす前に次の迷惑をかけてしまう。こういう気持ちが積み重なって、出産を機に休職、退職に至る人が出るのだろうと思う。私も、いっそ辞めた方が良いのかと迷ったことがある。でも、今だけ、一時だけと周囲に手を合わせ、自分を励ましている。先日、久しぶりに研修医時代を共にした同期女医さんと会う機会をもてた。同時期に育児をしており、悩みも共通するものがあった。話して全てが解決する訳ではないが、なんだかすっきりした。

最後になるが、職場復帰にとても大切な保育園探しについて、個人の経験だが参考になればと思い、記載する。

保育園探し1：殆どの保育園は早くても生後3ヶ

月から受け入れだった。子供のことを考えるとその方が良いだろうが、私の場合は時間がかかるほど職場復帰しにくくなると思ったので、随時入園可、生後2ヶ月から預かってくれて、授乳にも通える職場の保育園にお願いすることにした。自分だけでなく育児の専門家にもみてもらっているという安心感があり、乳幼児に関する様々なことを教えてもらって非常に助かった。とても家庭的な保育園で、子供も喜んで通っていた。

保育園探し2：上記保育園が3歳までなので、引き継いで預けられる所を子供が1歳半を過ぎる頃から探し始めた。自宅または職場の近くで、送り迎えしやすく、場所が分かりやすい所(両親以外にお迎えを頼む可能性がある為)、出来れば認可保育所という基準で探した。インターネットを活用したり、直接評判を聞いたりして、休日を利用して3～4カ所下見をし、最終的に2カ所に希望を絞った。1回目の申し込みで入るのは難しいと思い、1年の猶予を持って2歳の時点で必要書類を揃えて役場の保育課に提出したところ、幸運にも認可保育所へ入園できた。子供の方は、当初は泣いたり後追いがあったりしたが、現在では楽しそうに通っている。

子供を持ったことで作業は増えたが、その分世界が広がったと思う。これからどんなことがあるか分からないが、我が子が一人前の社会人として巣立つことが出来るように、まだまだ頑張らねばならないと健康長寿を目指している。

日常雑感（厄年と育児）もしくは体力低下と子供との遊び

高宮城皮フ科
中野　純一郎

今年で41歳を迎えます。数えで42歳。厄年を信じているわけではありませんが、40歳を越してから急に肉体、精神的な疲労が取れにくくなっているのは自覚していました。仕事から帰り、シャワーを浴びた後はもうぐったりで、その後はだらだら過ごしてしまいます。

視力：これがいわゆる老眼というものか仕事で近くのもの、小さいものを凝視することが多いため視力に変化が出てきたことがはっきりわかります。もともと良性、悪性の鑑別など重要な時はデルマトスコープが欠かせませんが、多くの小さな腫瘍性病変を観察するときにはめがねの上からのぞいたり、いぼの取り残しがないか確認するため、胸のポケットに拡大鏡を常備しています。いずれ眼鏡も遠近両用レンズを使うことになるのでしょう。

腹囲：昨年の検診で、85センチ以上あり（詳しくはかけませんが)、また脂質異常や血圧がやや高めで、コメント欄に「あなたはメタボです」と書かれてしまいました。他科の先生方ほどではありませんが皮膚疾患にも乾癬その他生活スタイルを指導する疾患が多数あるため、これまでもそこそこ自分の体のコントロールに気をつけていました。悪くても現状維持でいいかと考えていましたが、最近、子供（6歳と2歳）と入浴する際、おなかで遊ばれてしまいます。「ぽよんぽよんぽよんぽよん」「お父さんのせなかはお腹みたいになってきている。せなかがおなかとくっついてる！！」

童謡を引用して遊ばれている（しかも内容は逆)。さすがにこれはまずい。まずいとおもっているだけではまただらだら時間が過ぎてしまう。体力がないので面倒くさがってしまう。学生時代と体重はそんなに変わらないので全身の筋肉量が減って基礎代謝量が減り、脂肪がかなり増えているのだ。間食をふくめ食事量も多いわけではないので、やはり運動をすべきなのだ。

iPad：これまでも時間があればネットサーフィンをして有用無用の多くの情報を見ていました。買えないのに毎月のように出る新車やAV機器情報を集め、まじめなところでは患者さんが使用している一般薬、健康食品のほか日常生活用品に含まれる成分を確認したりしていました。

しかし、昨年末に買ったiPadにより更にネット社会にはまり込むことになりました。パソコンのように重い仕事をしなければ、使い勝手のいいアプリが大活躍です。ウィキペディアで調べ物（Wikipanionを使うべきです。Wikipediaが今まで以上の百科事典へと進化します。一部の情報は偏った見方がされていることがあり注意が必要ですが。）アマゾンでの買い物（ついポチッと押してしまうので、余計な買い物が増えてしまうのが難点ですが、専門書もそこそこそろっているので便利です。）など、ソファのうえであっという間に時間が過ぎ去っていきます。

これではいけない。今日から運動だ。ジムに通う時間がないというのは言い訳に過ぎない。でもいきなりこのおなかではスポーツマンが多いと思われるジムにいきなりいくには逆に勇気がいる。育児というより子供の相手が楽しいので子供と一緒に体を動かそう。
散歩：マンションそばには小さな公園がありサッカー少年たちが夕方には集まってくる広場もある。そばには小さな遊具もあり、うちの2人のこどもにはちょうどいいが僕の運動にはなりそうにもない。少し離れるとコンベンションセンターもありトロピカルビーチもある。6歳になったばかりの息子をつれて遠くの公園まで歩こう。いつもは車であっという間に通り過ぎる場所も、子供は足元の小さなものをよく見つける。ただの雑草も、触ると閉じるとわかると、全部の葉っぱを触りだす。楽しそうにするのでつい童心にかえり僕もオジギソウをついつい撫でたくなるが、息子は自分で触って閉じさせたいようで文句を言われてしまう。歩いていることより立ち止まっていることが多く、体を動かすことが目的のはずだが、まあこれもいいか。ようやく公園に到着して子供を遊具で遊ばせながらそばを歩いてみる。ただ歩くだけだがスピードをはやめるとすぐに心拍数の増加がみられる。どこまで体力が落ちているのだろう。心肺機能の低下まで自覚させられた。

早歩きからジョギングまで自分の体力にあわせて、いつまで続けられるかわからないがこれを続けていきたい。別の運動方法もあるだろうし、体を鍛えるにはやはりジムに通うほうがいいに決まっている。でも子供との日常の些細な触れ合いを今は大事に思っている。むしろ子供に飽きられないように雑草の知識、小さな昆虫の知識を仕入れよう。そのうちサッカーやキャッチボールもいっしょにしよう。今は肉体改造して急に体を作ることよりは子供の相手をして（相手をしてもらって）少しずつ体力増強を心がけよう。僕にとっても子供にとっても今はそれが一番だから。

沖縄で得た心の栄養

八重瀬会同仁病院皮膚科
菅野　美紀

皆様はじめまして。平成8年に筑波大学を卒業し皮膚科医となり、その後、縁あって沖縄に参りまして丸6年となります。沖縄で出会った趣味についてお話したいと思います。

当地へ転居後まもなくの出産となり、しばらくは仕事から離れ育児と向き合う生活をする中、親戚も居ない沖縄でどうにか居場所を探そうと、当時小学1年生の長女と新生児の長男を連れいろいろと動きまわりました。長女が小学校での琉球舞踊（放課後子供教室）に参加し始め一緒に同伴し、また自治会エイサーに参加したことなどで感じたことのひとつは、沖縄では伝統芸能がとても大切にされ受け継がれていること。これはとても素敵なことです。

前任地千葉県旭市にいるころ旅行で沖縄に来た時、なにげなく入った三線屋さんでハイビスカス柄の三線に出会いました。その後、三線に興味を持った数名が我が家に集まり、食事（宴会？）をしながら練習していました。食事か三線かどっちがメインであったかわかりません

が。応援部出身で声量豊かな夫が先生役です。私はといえば、工工四（楽譜）を見ながら弾くことはできましたが歌えませんでした。子供のころから「おなかの底から声を出して歌え」という先生の言葉がピンとこないぐらい歌は得意でなく、合唱などでも歌を避け伴奏で参加するほうでしたので尚更です。

当時、思いきり自己流の練習でしたが、メンバーそろって病院の忘年会で決して上手ではない演奏をしたり、と楽しかった経験があったからこそ今も楽しめているのではないかと思います。

沖縄に来て落ち着いた頃より前述の三線屋さんで毎週開かれている教室に通い始めました。出産をはさみブランクもあり、あいかわらず弾けるが歌えない状態で数年経過・・。それでも、お菓子を食べながらユンタクするのを楽しみに通い続けるうち、歌詞を覚えたからか、なんとなくの歌三線となりました。

半ば強制的にかぎやで風の試験も受け、それをきっかけに古典の研究所を紹介され通い始めることに。私にとっては歌詞の言葉も難しく、歌のメロディと三線で弾く音が違う為さらに苦労しますが、意味がわかりはじめると親しみが徐々に湧いてきました。さぞかし堅い歌なのだろうと思いきや恋のうたがとても多いなど意外でした。今年は新人賞をめざし伊野波節を練習中です。「伊野波の石くびり無蔵連れて登るにやへも石こびれ遠さはあらな」。ちなみにこれも恋のうたです。

さて、沖縄でもうひとつ私の中を大きく占めるのが海。もともと大学時代水泳部なので泳ぐこと、水に漂うことが好きなのですが沖縄の海がすばらしい！故郷横須賀の海も好きですが沖縄の海は格別です。本島周辺はもちろんのこと、西表の星砂海岸、宮古島の吉野海岸など魚がワーッと泳いでおり驚きました。最近では渡嘉敷島でウミガメと遭遇し子供とともに大喜びしたことも。皮膚科医があまりお肌真っ黒ではいけないですし、紫外線の怖さは心得ているつもりですので普段は日焼け止めを塗り沖縄の陽射しに対抗すべくがんばっていますが、海にいるときはついつい忘れがち。子供には筒型の水中のぞきめがねをつけさせ、浮輪のひもをひっぱりつつ海中をのぞいているうち時間をも忘れてしまいます。何度あとから日焼けで後悔したことか。

数年前北谷町砂辺でダイビングをする機会にも恵まれ更に魅了されました。かろうじて光がさす方が上とわかる中、ソフトコーラルが揺れ、魚たちが舞う。何ともいえません。私たちが防水カメラも手に入れ、写真を見せながらうれしそうに話すものだから、私の両親は沖縄へ来る際、海には行けるのかと必ず確認します。季節に関わらず。ある時は「カクレクマノミを見たい」、娘たちも「ぜひおじいちゃんおばあちゃんに見せたい」、と三世代でビーチへ行きました。さすがにそれは11月の寒い日で、青い唇で震えながらでしたが両親はとても感激していました。地元沖縄の方はあまり海に入らないと聞きます。もったいないです。ぜひ海の中をのぞいていただきたい。くれぐれも日焼けに気をつけながら。

この度日本を未曾有の災害が襲いました。被災された方々を思うととても胸が痛みます。東北地域経済振興への一助にと、今回夫の故郷山形を紹介しようとも迷いましたが書き尽くせず、不謹慎かと思いつつ私の趣味（好奇心が強いので一部ではありますが）の話となりました。山形に興味がおありでしたら個人的でもお尋ねいただけたらと思います。最後までお付き合いいただきありがとうございました。

皮膚科入局雑感
－日本皮膚科学会西部支部学術大会にむけて－

琉球大学大学院皮膚病態制御学
（皮膚科学教室）　宮城　拓也

【当医局について】

私が所属する皮膚病態制御学講座は主任の上

里博教授を中心に日々の診療、研究に励んでおります。皮膚科学教室は上里教授のコンセプトのもと、診療は主に皮膚外科グループ、皮膚内科グループ、そして研究グループに分かれてあたっております。

皮膚外科グループは皮膚悪性腫瘍の診療を中心に行っておりますが、その中には「成人Tリンパ細胞白血病」と「頭部血管肉腫」といった非常に悪性度が高く予後が厳しい疾患もあります。現在、当科では他科との密な連携のもとでそれらの治療に携わっており、患者様のより良い未来のために頑張っております。

皮膚内科グループに私は所属しており、「強皮症、皮膚筋炎、SLE」といった膠原病を中心とした自己免疫疾患の診療に力を入れており、非常に積極的な治療を行っております。

このような臨床にあたっている当科に、去年4月より京都大学医学部皮膚科にて角化症の研究をされていた高橋健造先生が准教授として赴任され、研究室が立ち上がり大学病院としての責務である研究業務を行う体制が整ってきました。このように当医局は臨床・研究ともに充実し、やりがいのある医局へと邁進しております。

医局集合写真

【入局した理由】

私は研修医の当初から自己免疫疾患、特に膠原病の診療に携わりたいと考えておりました。そのため、免疫抑制療法において避けられない重篤な副作用である感染症について勉強したいと思い、研修医時代は当院の第一内科（主任：藤田次郎先生）、中頭病院感染症内科（主任：新里敬先生）で研修させていただきました。また、沖縄における膠原病・リウマチ診療の拠点である豊見城中央病院腎臓・リウマチ・膠原病内科（主任：潮平芳樹先生）でも短期間ではありますが研修させていただき、非常に充実した研修生活を過ごさせていただきました。そして、膠原病の最も重要な身体所見の一つである皮膚症状を中心に勉強するために皮膚科に入局しました。

日常診療において、我々は検査値についつい目が行きがちですが、診療を行う上での基本であり診断において最も重要な要素は身体所見だと私は考えています。そのため、皮膚症状がほぼ必発である膠原病において、皮膚症状を読み取ることは非常に重要だと思います。身体所見を中心に診療することによって、血清学的に診断困難な膠原病の診断が可能となります。その代表例が皮膚筋炎です。現在、皮膚筋炎の責任抗体は研究室レベルでしか測定できないため、その診断は皮膚症状によることが多いのが現状です。もちろん、血清学的な裏付けも重要であるため、結果は数カ月かかりますが金沢大学医学部皮膚科に責任抗体の同定もお願いしており、将来的には当科で責任抗体の特定が可能になるよう努めております。

【学会開催に向けて】

現在、我々は今年の来る10月8日（土）、9日（日）に行われる第63回日本皮膚科学会西部支部学術大会の開催にむけ、準備を進めております。皮膚科の枠に囚われない学会にしようと多彩で多様な講演を企画しており、そのひとつとして宇宙航空研究開発機構（Japan Aerospace Exploration Agency:JAXA）より若田宇宙飛行士や野口宇宙飛行士の宇宙長期滞在フライトで運動プログラムを担当しておられた、大島博先生にご講演を依頼しております。大島博先生には医学的にみた宇宙環境における人体の話をしていただけると思います。

また、私の個人的な希望が大きく反映された膠原病のセッションも非常に楽しみでありま

す。ご講演していただく先生は、聖路加病院の岡田正人先生（主任：岡田正人先生）、東京医科歯科大学の上阪等先生（主任：宮坂信之先生）、京都大学の藤井隆夫先生（主任：三森経世先生）、金沢大学の藤本学先生（主任：竹原和彦先生）、和歌山医大の古川福実先生（主任：古川福実先生）といった国内の第一線でご活躍されている先生方ばかりです。内容も膠原病の抗体やＴ・Ｂ細胞との関連といった基礎研究の話から、膠原病の合併症の一つである肺動脈性肺高血圧症の診断・治療、日本では保険適応外ですがハイドロキシクロロキンによる治療といった実際の臨床的な話まで幅広くお話しいただく予定になっております。

このように多彩で充実した学会でありますので、皮膚科医のみならずご興味がある先生方はどなたでも遠慮なく当医局にご連絡ください。

【国内学会発表】

学会を主催する側になって良かったことは、前述したように学会講演を自分が聞きたいようにセットアップできることです。しかし、当然のように学会主催は良いことばかりではありません。準備の手間や苦労はもちろんのこと、資金の問題があります。今回の学会では昨今の不況や震災の影響をうけ、寄付金が予定の予算を遥かに下回りました。そのため、赤字分を埋めるべく、去年から今年にかけて国内の大きな皮膚科学会に参加し宣伝活動に努めてきました。もちろん、学会にただ宣伝のために参加したわけではなく、参加の度に発表もしてきました。そのため去年は国内学会の発表は３回、その他の地方会・勉強会での発表は８回を数えました。そのうち、最も印象に残っているのは宮城県仙台市で開催された第74回日本皮膚科学会東部支部学術大会（会長：相場節也先生）です。その理由として、豪華な懇親会や美味しい食事なども挙げられますが、幸運にも学会会長賞を頂けたことが最大の理由です。自分の発表が学会会長賞を受賞するとは夢にも思わなかったので確認もせずに懇親会の途中で退席してしまい、授賞式を欠席してしまったことが非常に心残りではありますが、それも今となっては忘れ難い思い出の一つです。

【最後に】

皆さんご存じのとおり宮城県を始めその周辺地域は東北関東大震災での被災地であり、現在も復興の端緒についたばかりであります。遠く離れた沖縄から震災の被害を受けた方々を支援できることは限られていますが、我々が協力できることは確実に存在します。特に、阪神大震災の際にも話題になりましたが、復興は１～２年で成し得ることではなく十数年以上もかかるかもしれません。今できることを可能な限りやることも大事ですが、支援し続けることが最も大切だと思います。金銭的には苦しい西部支部学術大会ではありますが、学会を通じて持続的な支援の姿勢を打ち出していければと思っています。

【連絡・問い合わせ先】

琉球大学皮膚科医局
沖縄県西原町字上原207臨床研究棟902号室
℡098-895-3331　Fax098-895-1417
E-mail：hihuka@jim.u-ryukyu.ac.jp